

野沢初市と俵引き

野沢宿の始まりは野沢原町村が駅所になった元和6年（1620）ごろで、野沢本町村が駅所になった文化3年（1806）に両村が一つになって野沢宿ができ上がりました。越後街道3大宿場（津川・坂下・野沢）の一つで大きさでは3番目でした。野沢原町村は寛永3年（1626）蒲生家から『六斎市』^{ろくさいいち}（3と8の付く日に開く月6回の市）を開くことが許されます。野沢原町村の12km四方では別の市を開くことはできませんが、野沢本町村は近かったためか駅所になる以前にも野沢原町村と同じように市は開かれていたようです。近郷近在の人々が穀類のほか、春は切干しや山菜、秋は松茸や栗茸などを、越後の商人が海産物などを持ち寄り大いににぎわいました。また、会津若松や会津坂下の商人が地元で販売する材料を仕入れる所でもあったようです。寛文5年（1666）ごろには両村とも市の回数は次第に減るようになりましたが、正月13日には市始めの式として村の者全員が上下に分かれて俵を引き争い、これを『米引き』と称して市神様のお祭りを行っていました。当時、両村では別々に行っていたようですが、弘化4年（1847）ごろには両村が一緒に『俵引き』をするようになったようです。日清戦争の前あたりまでは小柴米屋（現ふるさと自慢館、元は五十嵐^{いけんだん}検断宅）の屋根から米俵を落として原町と本町の二手に分かれて「米俵」を引き合いました。この俵引きの様子は残念ながら記録に残っていませんが、昭和5年ごろに喜多方市小荒井で行われていた俵引きでは、人の上に人を重ね頭上を踏み渡り、立ち上る氣息と喚声は壯観の極みであったそうです。野沢の俵引きも同様だったのではないのでしょうか。



▲「俵引き」の想像図（絵：田崎敬修さん）



▲ふるさと自慢館



道の駅にしあいづ

朝晩めっきり涼しくなり、秋の訪れを感じる今日この頃です。秋といえば「ふるさとまつり」。お知らせにも掲載しましたが、今年は10月28日、29日です。ぜひ遊びに来てください。長谷川祐一

編集後記



▲一緒に出席した親族の皆さんと。左は娘の矢部ミキ子さん、右は孫の妻の三瓶志津子さんと玄孫（やしやご）の菅山陽向汰（ひなた）くん。

今月の表紙は、町最高齢の三瓶ヨノさん。9月17日に行われた「奥川地区敬老会」に出席した三瓶さんは、久しぶりに再会した友人と楽しくおしゃべりしたり、料理をおいしそうに味わったりと、107歳とは思えない元気な姿を見せ、会場の皆さんを驚かせていました。

今月の表紙